

## 国際協力特別賞

# マイクロアグレッションを超えて

同志社国際中学校 3年 フォーク 黒田 レイモンド 豪

僕は日本人であり、アメリカ人でもある。日本で生まれ育ち、地域の保育園と小学校に通った。アメリカ人の父、日本人の母は、僕をダブルとして育て、日本語と英語、日本文化とアメリカの文化を学ぶ機会を与えてくれた。そのため、僕は自分のことを日本人でアメリカ人だと思っているが、友達や友達のお父さんやお母さん、ボーイズリーグの野球のチームメイトなどから次のような言葉をかけられることがある。「レイモンドって外人なん?」「レイモンドくん、日本語ちゃんと喋れてすごいやん!」「レイモンドって、いつアメリカに帰るん?」その度に、僕はちょっと馬鹿にされているような気がして、モヤモヤした嫌な気持ちになった。同じような質問を繰り返されることにも正直うんざりして面倒くさくて、いつも適当に答えていた。ある日、このような体験について母に話すと、「それってマイクロアグレッションかもね。でも相手は悪気はなくてレイモンドに興味を持って質問してるんやろうね」と言われた。

マイクロアグレッションとは、「無意識の偏見や差別によって、悪意なく誰かを傷つけること」とされている。確かに、周りの人々の何気ない発言は、僕にとっては「マイクロアグレッション」だ。でも、周りの友達や友達のお父さんお母さんは、僕を傷つけようという気はない。ただ単純に、ちょっとみんなと違う僕に興味を持っているんだと気が付いた。そこで僕は、このような質問や発言に対して丁寧に答え、僕の周りの人が僕を通してアメリカや僕のようなダブルの子、そして日本に生きる多様なバックグラウンドを持つ人々に対して、関心を持ってもらえるように働きかけようと思った。

僕が通っている中学校は、僕のようなダブルの子や帰国生など多様なバックグラウンドを持つ生徒が多いので、「マイクロアグレッション」の心配がなく、愉しく充実した学校生活を送っている。しかし、僕はこの夏休み、かつて「マイクロアグレッション」を受けたことがある昔通っていた学童保育所でボランティアをすることにした。子ども達は、僕のカタカナが入った長い名前や、僕のちょっと「外人っぽい」外見に興味津々で次々に質問してくる。でも、今回はもう「マイクロアグレッション」ではない。これは、僕に興味を持つ子ども達、そして子ども達のお父さんお母さんに、僕を通して日本社会に生きる多様なバックグラウンドを持つ人々や、広い世界に関心を持ってもらえるようになる絶好のチャンスだ。僕と交流することにより、僕の周りの人々にとって、僕のような「ちょっとみんなと違う日本人」が身近になってほしいと思う。日本人でありアメリカ人でもある僕に出来る小さな一歩。僕の周りの小さなサークルの人々と広い世界をつなぐ仲介者になりたいと思う。